

消息文

日本女子大學教授 鹽井文學士選



○都の友へ

岩代須賀  
川本町  
服部貞子

またしても田舎の自慢聞え上げ候。  
夏も眞盛りのきのふけふ、朝に星を戴いて静かに運ぶ  
杉の庭下駄、又なう輕うて心地よう候、よべ數へ置き  
し朝顔の見事はづれて垣根の外に僅に二つ三つ。  
憎けれど、うれしう候。黒く光れる此の顔洗ふべく、  
溢るゝ井水に近より候へば、可愛の小雀三羽しきり  
に何をかついばみ居り候。見れば、きのふ過ちてこぼ  
したる米幾粒、さてもよき功德になり候ものかな。  
がひしつゝ、我が草屋根を見やり候へば、此の間の雨  
にてや、いたぐ草々延びて候。さればか、低き家も、  
何となう高き心地いたされ候よ。

(雨評) 御自慢の價は天と定め申し候

七